

第45回

人と大地に 魅せられて



北海道に移住して約10年。東京出身の私にとって、この地の暮らしは驚きの連続。
出会った人々、食や自然に魅了された数々の体験について取り上げます。
今回は、西興部村にあるゲストハウス「GA.KOPPER」取材しました。

浅野和さんと妻の千世さん。二人でゲストハウスを営んでいる。宿泊についてはHPで。gakopper.com/

にしおこっぺ

西興部で気づいた、足元にある幸せ

遊び心満載のゲストハウス

北海道の北東部、オホーツク管内にある人口約千人の西興部村^{にしおこっぺ}に、ゲストハウス「GA・KOPPER（ガコッパ）」がある。オーナーは浅野和さん^{あきのわさ}。築七十五年ほどの元中学校の木造校舎を仲間とともに改修し、二〇一六年に宿をオープンさせた。ドミトリに加え、趣向を凝らした個室もある。テントを張って、あえて簡易ベッドを設置し、キャンプの雰囲気味わえる部屋や、酒造りに使う木桶をベッドにした部屋も。また、学校の面影を残す跳び箱や卓球台を家具にアレンジ。懐かしさと新鮮な感性とがミックスされた空間となっている。

浅野さんはゲストハウスの改修に才能を発揮するだけでなく、ハンターとしても活動しエゾシカやヒゲマの肉をメニューとして提供したり、以前に酒造りをしていたことから、希少な日本酒を宿泊客に振る舞ったりもしている。さらに、村のお祭りの盛り上げ役としても活躍。大きなリーゼントとサングラス姿の「コッパさん」というキャラクターを生み出し、不思議な踊りで会場を沸かせ

東京都出身。美術の専門出版社で雑誌・書籍の編集に約20年携わり、2011年に北海道へ移住。

2018年に「森の出版社 ミチクル」設立。北の自然や人をテーマにした本を刊行している。イラストエッセイ『山を買う』など。



元職員室を改修したサロン。森から運び出した巨大な丸太をバーカウンターに。学校に残されていた時計にガラスを乗せてテーブルにするなど随所に工夫がある。

る。ご当地ゆるキャラは全国にいるが、コッパーさんは「ゆるくないキャラ」なのだという。

ひたすら遠くへと向かって

こうした様々な分野に興味を持ち、それを極める姿勢は、子どもの頃から変わらない。札幌に生まれ、中学時代はスノーボードやスケートボードに熱中したり、ギターにのめり込んだりも。

「遊ぶことに関しては、攻め続けていましたね」

十六歳でバイクの免許を取り、仲間と夜中、疾走したこともあった。やがて一人でバイクと向き合うようになり、北海道を右回りと左回りで二周した。給油と食事や仮眠で止まる以外はずっと運転し続けた。続いて

青森から鹿児島まで高速道路を一気に縦断する旅に出た。

「バイクに乗っていると、気持ちがいざどんどん整理されていって、自分自身でいられる、落ち着ける居場所だと思いました」

二十六歳でアメリカへツーリングに出かけ、東から西、南から北と走った。この旅が自身を変える転機となった。

「アラスカの最北端、ここで道路が終わるという地点まで行きました。これまで、ここにはない何かがきっとあるはずだと思って走ってきたけれど、結局は何もなかった。ひたすら遠くへと向かっていった自分を否定されたように感じました」

この旅がきっかけで、多くの人の助けによつて自分が生かされていることに気づくことができたという。ス皮ードを希求する旅から人と心を通わせる旅へ。滞在した国は五十カ国以上。人生の伴侶となった千世さんとヨーロッパをツーリングしたこともあった。

旅の資金は冬季に北陸の酒蔵で働くことでまかなった。旅と酒造りとを行う暮らしは十数年続いたが、次

第に旅という行為に疑問を抱くようになったという。

「自分の欲求によつて燃料を消費したりお金を使ったりするのはなく、生きるというシンプルなことを目を向けたいと思うようになりました」

二〇一一年、西興部にあったキャンプ場の管理をする仕事に巡り合った。今までは旅をする側だったが、旅人を迎え入れる側の気持ちに立てたという。その後、民宿として使われていた木造校舎を引き継がないかという誘いがあった。

「これまでの旅で出会った人たちに恩返しをしたいと思います」

ゲストハウスを運営して今年で七年。コロナ禍で二年間の休業を余儀なくされたが、クラウドファンディングを行い、多くの人の支援によつて難局を乗り切った。現在、ライブやトークイベントも積極的に開催し、人々の輪をつくっている。

「移住してからストレスがまったくなくなりまして」と浅野さんは語る。自分の居場所とは、遠くのどこかではなく、いま自分が立っている足元にあったことを西興部の暮らしが気づかせてくれた。